

映画
の中の
子どもたち

第24回
スポットライト
 —ジャーナリストの魂—

川崎 二三彦

気になるニュース

かつて私は、全国児童相談研究会(児相研)のメーリングリストに、「気になるニュース」を見つけては不定期に投稿していた。かれこれ10年以上前にさかのぼるだろう。おもには、児童相談所関係の出来事であったり、虐待がテーマの事件などである。

本作品を見て、あらためて過去のデータを調べてみると、2007年7月17日AFPによる「ロサンゼルス聖職者の児童性的虐待事件、805億円で和解」という記事を投稿していた。次のような内容だ。

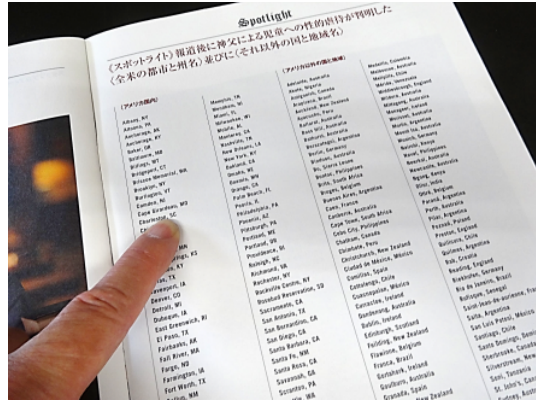
「米国最大のロサンゼルス大司教区の司祭らが数十年間にわたって信者の子どもたちに性的虐待を行っていたとされる事件で、同大司教区が被害者らに和解金6億6000万ドル(約805億円)を支払うことで原告側と合意したことが16日、明らかになった。

被害者508人を代表する原告側と被告の大司教区側の双方の弁護団が同日、ロサンゼルス高裁に出廷し和解を確認した。これにより、聖職者が関係したスキャンダルとして2002年にこの事件が発覚して以来、5年間におよんだ裁判に終止符が打たれた」

この記事に対して、私は次のようなコメントを書いていた。

「こんな事件があるのかと驚いた」「ほんとにこんな高額の賠償金を? 誤りではないかと、思わず再確認した」

コメントを読み直す限り、こうした事件があると知ったのは、このときが初めてのことであろう。とはいえ、聖職者が性的虐待行為を行ったというので驚いたわけではない。事実、この報道に接する2年前には、当時私が勤務していた児童相談所管内で、キリスト教系新興宗教団体の牧師が地位を乱用、信者の少女7人に対して計22件の性的暴行を繰り返したとして、求刑どおり懲役20年の刑が確定もしてい



る(聖神中央教会事件)。

問題は、こうした性犯罪が、長年にわたり多数の聖職者によって全米各地で、否、全世界で行われていたということだ(上の写真参照、ここに記載の地域すべてで犯罪が行われていたという)。

長い道のり

さて、こうした事件が自然に明るみに出ることは、通常起こり得ない。特に、世界中のどこであっても大きな影響力を持つカトリック教会組織の問題となれば、なおさらだろう。では、こうした事件はどのようにして発覚したのか。正直言って、当時の私はそこまで関心を払っていなかったのだが、事件が表沙汰になるまでには知られざるドラマがあり、それをまざまざと示してくれたのが本作品であった。アメリカ東部ボストン市で発行されている日刊地方紙ボストン・グローブのスクープを題材にした映画である。

教会は、聖職者による子どもへの性犯罪に気づくと、当人を病気療養や休職扱いし、次いで片っ端から転属させる。しかし、密かに行われるこの人事異動は彼らを罰するものではないから、必然的に広汎な地域に被害児童を広げることには貢献するだけであった。

本スクープが掲載された紙面のタイトルが、映画の題名にもなった「スポ



「スポットライト」であり、記事を担当するスタッフは、陰に陽に妨害する協会に屈せず、極秘のうちに調べ上げ、動かぬ証拠を一つ一つ積み上げつつ、個人の不幸事ではなく、組織犯罪であることに焦点を当てて確認作業を続けていく。途中、9.11 テロも発生して、一時は全員がそちらの取材に動員されるなど、さまざまな困難があっても、本記事はそれを乗り越え、ついには一面トップを飾ることとなるのである。

長い道のりだったというほかないが、翻って考えると、性被害を受け続け、トラウマを抱えているのに泣き寝入りを余儀なくされ、懊悩していた人にとっては、もっともっと長い時間であったと言えよう。

波紋

記事が出たあと、スタッフは、読者からどんな反応があるのか不安と期待の入り混じった気持ちで受話器を握る。何しろグローブ紙は、定期購読者の53%がカトリック信者なのだ。

待ち受けているところへじゃんじゃん架かってくる電話の内容は、しかし私の想像とは違っていた。

「協会を誹謗して怪しからぬ」

「勇気を出してよくぞ書いてくれた」

こんな反応が交錯して電話回線がパンクすると私は思っていたのだが、実際は、

「今まで誰にも黙っていたけれど、実は……」

「私も過去に……」

記事を契機に、これまで堪え忍んでいた人たちが、この記事によって勇気づけられ、記者を信頼して次々に自らの被害を告白してきたのである。「ス

ポットライト」は、その後ボストン教区にかかわる600以上の関連記事を掲載し、ピューリッツァー賞も獲得する。

生きられなかった人も？

とはいえ、彼らも自ら顧みて考える。というのは、聖職者による性犯罪には以前から気づいており、単発的には記事にもしていたのである。だから言う。

「私たちは暗がりの中を歩いていた。それが間違いだとは知らずに」「光が差し始めて、間違いに気づくのだ」

反省、怒り、正義感、使命感、ジャーナリスト魂、etc. さまざまな感情が混ざり合って闘う力が引き出されて初めて、光が差し込み、無理だと諦めていたことも、結実するのである。

と、ここまで思いつくまま書き連ねてきて、ふと気づく。私はこの映画をフィクションだと思わずに見入っていたということに。ただし、一言弁解させてもらうなら、それこそが、事実の確かな裏付けを力にした本作品の魅力だと言えよう。

それはさておき、映画の中で重く受け止めざるを得なかったのは、成人した何人もの被害者が、問われるままに苦難の道を語った後で付け加える言葉だ。

「でも、私はまだいいんです。生きていますから……」

* 2015/アメリカ

* 鑑賞データ 2016/05/02 TOHO シネマズ二条

* 公式 HP <http://spotlight-scoop.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/40389>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジーの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	
第19回	ショートターム	
第20回	真夜中のゆりかご	
第21回	きみはいい子	
第22回	ユール!	
第23回	サウルの息子	